平成 27 年度社会福祉学研究科・修士論文要旨

羞恥感情と認知のゆがみが社会的逸脱行動許容度に及ぼす影響

荒木田詩織

本研究では青年期の大学生を対象に、羞恥感情と認知のゆがみが、社会的逸脱行動の許容にどのように関連しているのか検討することを目的とし二つの調査を行った。今回の調査では、羞恥感情得点が高く、認知のゆがみ得点が高い人ほど、その後の逸脱行動の許容度が高まると予測していた。調査１では、羞恥感情と認知のゆがみの影響によって逸脱行動へは非許容的になる傾向が示された。しかしながら、一部の羞恥感情（自己不全感）と認知のゆがみ（虚偽過小評価）によって逸脱行動の許容度が高まる可能性が示唆された。そこで調査２では自己不全感と虚偽過小評価場面の影響で逸脱行動の許容度が高まるかどうかを検討したが、これらの関連を示すには至らなかった。その一方で、個人の持つ認知のゆがみではなく、場面によって生じた認知のゆがみ（虚偽過小評価）によって逸脱行動の許容度が高まる可能性が示唆された。つまり、認知のゆがみ傾向は状況によって変化していると考えられる。

しかし、本研究で設定した「友人・仲間集団に虚偽過小評価が生じている場面」と場面内の認知のゆがみの関連はみられなかった。このことから、今回の場面における認知のゆがみを変化させた要因は友人・仲間集団以外の影響が強く、その後の逸脱行動許容の判断にも影響を与えたと思われる。その一つの要因として、提示したエピソードの影響があげられる。本調査のエピソードの内容は、「カンニング・無銭乗車・未成年者との飲酒」の可能性を想起させるものであり、法律や参加者の所属する集団（大学）で明確な罰則規定があり強制力の強いものであったため、参加者は友人や仲間集団の影響よりも、エピソードの内容によって逸脱行動許容の判断をしたことが考えられる。

今後は、個人のもともと持つ羞恥感情や認知のゆがみ傾向と、状況によるこれらの差異も合わせて検討していくことが必要だ。これらの影響を検討し、逸脱行動生起過程を解明していくことは、くり返される逸脱行動の予防やその介入のためのアプローチの一助となるだろう。

補聴器装用時の聞き取りに関する基礎研究
―室内音環境による影響と視覚情報の活用―

石鉢みづほ

近年、通常の学級に在籍する難聴児は増加しており、大学等に進学する者も増えている。しかしながら通常の学級では口話によるコミュニケーションが基本であるため、音の聴取が困難である彼らには様々な課題が生じている。本論文では、難聴児童・生徒が円滑な音声コミュニケーションをとるための方法として、補聴機器の利用、座席位置、視覚情報の利用の３つの面からのアプローチが有効であると考え、２つの実験によってこれらの有効性を検討することとした。

実験１では、補聴機器の使用と話者の座席位置による聞き取りの違いの検討を目的とし、教室内にてグループ学習を行う場面を想定した収録音を音源とし、語音明瞭度の測定と音質主観評価並びに補聴機器使用時の方向感について検討した。実験２は視覚情報による音声情報の補完の程度を検討するため、映像＋音声刺激及び音声刺激を提示した場合の単語了解度の測定を行った。

これらの結果から、補聴器装用時は話者との間の距離によって音声情報量に差が見られるため、話者が遠くにいる場合は、視覚情報による情報の補完が重要であると言えた。また音質の面では、壁側よりも窓側に着席する方が良いと言えた。他方 FM 補聴システム使用時は、送信機のマイクロホンに入力される音声レベルが一定であれば、情報量の面でも音質の面でも聞き取りは保障されると言えた。しかしながら、方向感の面では判断がしにくくなるため、視覚による状況の把握が必須であることが示唆された。また SN 比が低いなど、聞き取りの条件が悪いほど視覚情報が有用であることが確認され、健聴者側のアプローチとしては難聴児・者にはっきり顔が見えるよう発話することが重要であることが客観的に改めて示された。

以上より、補聴器と FM 補聴システムは各々メリット・デメリットが存在するため、座席位置の移動や視覚情報の利用によってそれらを補うことが、音声コミュニケーション環境の向上につながると言えた。